

欲生心の象徴的自覚

7

本多弘之

honda hiroyuki

親鸞は、浄土への欲生心そせしんを阿弥陀如来からの「勅命ちやくめい」であると言う。勅命としての「欲生」とは、衆生の意識の深層から発起して、本来的存在へ回帰させようとする意欲であって、衆生個人の表層的意欲ではないということである。この深層の意欲から存在の本来性回復の教えが生み出される。この根源の意欲を掘り下げて生み出された教えが、『大無量

寿経』の本願の教説であるということである。この見方を曾我量深そがりよじんが、「親鸞の仏教史観」という言葉で考察したのである。

この仏教史観は「本願史観」とも言われている。これは親鸞が、『大無量寿経』は「如来の本願を説きて、経の宗致しゅうちとす」と言われたことに由るのであると思う。経の「宗致」が「本願を説く」ところにあるということ

とは、当たり前のようなのだが、実は大切な眼目を押さえているのである。本願に立つてこそ、その他の教義概念の意味が、仏道にどうつていかなる位置をもつかが決定されてくるからである。「浄土」とか「往生」というような浄土教にとつての鍵概念（キーターム）であっても、本願の達成成就のために説き出されてきているということだからである。



仏道の歴史が、この衆生の深層に呼びかける勅命としての欲生心から生み出されたのである。それを生み出す本願を衆生が受け止め、その本願を依り処として凡夫が仏道を証明できることを明らかにしてきた歴史が、『大無量寿経』の歴史であるということである。本願念仏の歴史が『大無量寿経』伝承の歴史であり、「世の盲冥」が「光明に撰取」されて、浄土の明るみを感じてきた歴史であるということである。

その本願の中心に第十八願があつて、それが「念仏往生」の願であると源空が決定した。願文に随うなら曇鸞が名づけたように「十念往生の願」なのであるが、「十念」にはまだ多義性が残る。それを「十念」の意味を「念仏（称名念仏）に限定したのである。しかし、「念仏」と「往生」との関係は、どういうかわりなのか。因果なのかどうなのか。二つの言葉の間に、時間・空間が挟まるのかどうなのか。そういう疑問を解きほぐすことは容易ではない。それが困難になるのは、それらの浄土教の言葉を、本願の意図とかわりなく、衆生の時間・空間において、体験的に了解しようとするからではないか。

親鸞の思索は、言うまでもなくしつかりとした体験の裏付けがある。それでなければ、七百五十年の時を越えた現代の人間に、このように響いてくるはずがない。しかしその体

験には、因位の血の出るような悪戦苦闘が下地になつていゝことも忘れてはならない。時代状況が大きな変革期ないし変動期だったことは、よく言われるように親鸞の思想の厳しさに深く影響しているのも事実であろう。その彼の体験とは、仏教の教説との合致を目指しての毎日毎時の確認作業であつたのではな

いか。宗教的な体験とは、何であろうか。言うまでもなく単なる日常経験の一種ではあるまい。それでもすれば、神秘的でマジカルな言説も不可能な体験のようにとらえられる面もあるかもしれない。しかし、こと親鸞の信仰体験については、そういう個人的特殊な神秘体験を払拭する方向が判然としているのではないか。

現代思想が呪術的な畏れや他律的な脅威を乗り越えるところに特質があるとも言われる。その意味では、親鸞の思想は時代を超えて、現代に通じる思想という一面ももっていると思う。その時代を超えて人間の根源に響く力は、実は無限なる大悲が衆生の根源に呼びかけて止まない如来の「勅命」にあるということではないか。この勅命の体験を、親鸞は教説との「相応」にあると見定めたのである。天親が『浄土論』で「与仏教相応」と言われている。「相応」とは、言葉と体験の一致を表そうとするのではないか。天親が「世

尊我一心」と言われたところに親鸞は、仏陀釈尊の教説によつて仏陀の呼びかけに一致できた慶びを天親菩薩が表現しているのだ、と受け止めた。

さらに、その相応を、天親は「如実修行相応」と解義分で言う。讚嘆門の意味づけで「彼の名義のごとく、実のごとく修行すること」に相応することとされている。この「如実修行」を曇鸞は「不行の行」と言われるが、菩薩の如実修行（不行の行）とは、『大無量寿経』に照らせば法蔵菩薩の兆載永劫の行であると、親鸞はいただいた。『経』の物語は、衆生の根源にはたつき続ける深層の意欲の表現である。その意欲が寝ても覚めてもはたつき続けて、煩惱具足の衆生の意識を突破して、願力への帰依を發起せしめる。この深層のはたらきから起こる帰命の信念は、阿弥陀の願心が「名号」を選択したという教えの意味との「相応」でもあるということである。

だから、「南無阿弥陀仏」の名号における「帰命」（南無）は、「如来すでに発願して、衆生の行を回施したまうの心」であると言われ、「本願招喚の勅命」であるとも言われるのである。衆生から帰命するよりも根源的に、全存在を挙げて如来が衆生に帰命してくださつていゝという受け止めである。

（ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長）